

平成25年度 学校評価計画

徳島県立ひのみね支援学校

徳島県教育 基本目標	『とくしまの教育力を結集し、未来を創造する、たくましい人づくり』 ～県民とともに考え、ともに育むオンリーワン教育の実現～	
学校経営 基本方針	「三つの保障」「二つの指導」「一つの約束」 三つの保障：「安全の保障」、「学習の保障」、「人権の保障」 二つの指導：「規律と礼節」、「人間性」と「専門性」の融合 一つの約束：「地域や保護者に開かれた学校」	
本校の 教育目標	教育基本法に基づき、児童生徒一人ひとりの個性と人権を尊重し、自立と共生に向けて、自己実現に努める心豊かな人間を育成する。	
本年度の 重点目標	1 安全の保障 (1) 防災教育と防災管理の充実と推進 (2) 防災に係る関係機関等との連携と協力体制の推進 (3) ユニバーサルで多重感覚を促す教育環境の充実と推進 2 学習の保障 (1) 外部の専門家を導入した授業改善にむけた取組を検証 ～「自立活動」に係る実態把握と指導・評価について～ (2) 一人ひとりのキャリア発達を促す教育プログラムの実践 (3) 感動と癒しの体験につながる授業づくり 3 人権の保障 (1) ICFの理念に基づく障がい児の理解と啓発を推進 (2) 交流及び共同学習の充実 (3) 障がい児・者等のQOLの向上に向けた支援	
	年度末総合評価	次年度への課題
	安全の保障に関して、防災関連の取組を積極的に行った。しかし、安否確認や備蓄に関する件にまだ課題も残されている。学習の保障では、外部専門家導入による授業改善が、実践報告会を開催することにより、その成果を広く外部関係者に広報できた。またキャリア教育に関する取組も、個々の進路希望に応じたプログラム作成により、資格取得にチャレンジするなど効果的な実践につながった。児童生徒の障害の重度化に対応した感動と癒しの体験につながる授業づくりでは、校外での実体験や、校内における環境設定の工夫などにより実践できた。人権の保障では、一人ひとりを正しく理解するため、ICFやLIFEの研修を積極的に行った。交流及び共同学習を推進するために、事前事後指導の充実・徹底や、間接交流の工夫などにより、形骸化させることなくあらゆる機会を捉えて本校の啓発に努めた。 総合評価として、評価指標達成度は十分満たしているが、新たな課題点や改善点が明らかになった。	安全の保障に関して、保護者を含めた安否確認の整備が急がれる。現在の取組をしっかりとシステム化し定着させると共に、アクションカード作成や、備蓄品の見直しも必要である。また、安全安心、感動と癒し体験の充実のために、教室・校内環境の整備をさらに進める必要がある。学習の保障では、外部専門家を導入した授業改善の取組は一定の成果を上げている。しかし、まだまだ教員の理解不足が懸念される事から、計画的に研修を積み重ねることにより、個々の教員の専門性を向上させ、さらなる授業改善に取り組む必要がある。キャリア教育支援プログラムの活用に関する課題に対しては、その原因究明を含め、全学部が組織的に活用を進めていく必要がある。人権の保障では、本校の理解啓発を兼ねた「交流及び共同学習」において、地域のサポーター養成も含め、無理・無駄のない末永い交流継続が重要である。間接的な交流についても様々な工夫を凝らし、効果的に実施する必要がある。今年度明らかになった課題は、次年度に向けてさらに検証し、次年度の重点目標、活動計画として学校力向上を目指し取り組みたい。

重点目標 1 安全の保障に向けて		自 己 評 価		学校関係者評価	次年度への課題	
重点課題	重点目標	活動計画と評価指標	評 価	学校関係者の意見	今後の改善方策	
防災教育・防災管理の充実と関係機関との連携・協力体制の推進が必要である。	<p>(全校レベル)</p> <p>①防災教育の充実と防災管理の点検と見直し。 [学校生活部]</p> <p>②防災に係る関係機関との連携と協力体制の推進。 [学校生活部]</p>	<p><活動計画></p> <p>①5月・10月・2月に地震・津波想定避難訓練を実施し、8月に放水訓練、10月に火災想定避難訓練を実施する。また、各学部の学級・ホームルームで避難訓練の事前事後の学習や、児童生徒の実態に応じた防災学習を自立活動や理科・社会等の時間に実施する。火元責任者・防火管理責任者による各教室・設備等の点検とチェックを実施する。</p> <p>②5月・9月・1月にひのみね学校防災地域連携協議会を実施し、本校との連携・協力体制を推進するとともに、その後の避難訓練や防災学習を充実させる。防災キャンプを本校で実施し、地域との協力体制を強固にする。</p>	<p><活動計画の実施状況></p> <p>①5月・8月に地震・津波想定避難訓練を実施し、8月に放水訓練、11月に火災想定避難訓練を実施した。2月にも地震・津波想定避難訓練を予定している。また、各学部の学級・ホームルームで避難訓練の事前事後の学習や、児童生徒の実態に応じた防災学習を自立活動や理科・社会等の時間に実施した。火元責任者・防火管理責任者による各教室・設備等の点検とチェックを毎月実施した。</p> <p>②5月・10月にひのみね学校防災地域連携協議会を実施し、本校との連携・協力体制を推進するとともに、その後の避難訓練や防災学習を充実させた。2月にもひのみね学校防災地域連携協議会を実施予定。8月に防災学習キャンプを本校で実施し、地域との協力体制を強固にした。</p>	<p>重点目標1の総合評価</p> <p><評定></p> <p style="text-align: center;">A</p> <p>-----</p> <p><所見></p> <p>今年度計画した各訓練や、児童生徒の実態に応じた防災学習が計画的に行うことができた。防災学習を通して、自分で判断して行動できる生徒は、危機感を持って、自らの命は自分で守るという意識が芽生えつつある。また、教員の間でも、実際の災害時にはどう行動すればいいのか等の会話が日常場面でも見られるなど、防災に関する意識が向上している。</p> <p>ひのみね学校防災地域連携協議会の開催により、地域住民の本校に対する理解が広がった。防災学習キャンプの実施により、地域の方とじっくり防災等に関して話す機会が持てたことは、お互いの理解推進につながった。また、地域の方々の意見を、アンケート等を通して聞くことができた。防災をいろんな角度から見ることにより、新たな課題も見つけられ今後の改善点も明らかになった。</p>	<p>校内で被災した場合には、様々な対応が検討されているが、登下校中に被災した場合の対応等を具体的に準備しなければならないのではないか。</p> <p>夜間や校内に職員がいない休日等の災害に備え、地域の方に学校施設の具体的な利用等を示しておく必要がある。</p> <p>災害時に対応したアクションカードを作成し、具体的にどのように行動すればいいのかを示すと共に、どれくらい支援がどこで必要なのか明らかにする必要がある。</p> <p>被災後1週間持ちこたえるだけの、個々の児童生徒の実態に応じた準備(備蓄食料等)をする必要がある。</p>	<p>ひのみね学校防災地域連携協議会を継続して実施し、地域との連携・協力体制をより確かなものとしていく必要がある。</p> <p>休日や放課後等の災害時における、教員や児童生徒の安否確認手段の整備。</p> <p>防災キャンプ実施後の反省から、さらに地域と連携した防災訓練等のあり方を検討する。</p> <p>災害時の避難所運営や、学校再開に向けての具体的なプログラムの見直しが必要。</p> <p>防災・減災への具体的な手立て等を検討し、多様な訓練を実施して改善を図る必要がある。</p>
		<p><評価指標></p> <p>①防災避難訓練(地震・津波・火災)を学期に1回以上実施するとともに、各学部・学級・ホームルームで年間3回以上防災に関する</p>	<p><評価指標の達成度></p> <p>①5月・8月に防災避難訓練(地震・津波対応)を実施し、11月に火災避難訓練を実施した。各学部・学級・ホームルーム</p>			

		<p>学習を行う。火元責任者による各教室の点検とチェックを毎月実施する。防災担当者による施設・設備等の点検を学期に1回実施する。</p> <p>② ひのみね学校防災地域連携協議会を学期に1回実施する。防災キャンプ(一泊)を夏季休業中に本校で実施する。</p>	<p>で年間3回以上防災に関する学習を行った。火元責任者による各教室の点検とチェックを毎月実施。防災担当者による施設・設備等の点検を学期に1回実施した。</p> <p>② ひのみね学校防災地域連携協議会を5月・10月に実施した。(3学期にも予定)防災キャンプ(一泊)を8月に本校で実施した。</p>		
<p>多重感覚を促す教育環境への取り組みが不十分である。</p>	<p>多重感覚を促す教育環境の充実。 [全学部]</p>	<p><活動計画> 教室移動、活動の準備と後片付けを学習活動に位置づけ、知覚刺激を組み合わせることで周囲の状況をわかりやすく伝える活動に取り組む。</p> <p><評価指標> 「多重感覚を促す環境を整えることで、生徒が安心感を持ち、予想される変化にむけて自らの態勢を整えることができるようになった」という評価をアンケートにより80.0%得る。</p>	<p><活動計画の実施状況> 教室移動、活動の準備と片付けを学習活動として行うことを定着させた。安全・安心な教室環境チェックリストを夏期休業中、2学期末に実施し、「できていない」項目を確認して、改善・工夫を実施した。</p> <p><評価指標の達成度> 教員に対するアンケート結果で「とても思う」が12名(26.6%)、「そう思う」が29名(64.4%)合計91.1%であった。</p>	<p><所見> 本校の児童生徒の95%が重度重複障害児であり、自立活動を主として指導する教育課程を履修している。</p> <p>このような現状から、児童生徒が安心感をもてるよう知覚刺激を組み合わせることで周囲の状況をわかりやすく伝える等の環境設定は教育活動において不可欠である。</p> <p>常に計画的に環境を整えることや、個々の児童生徒の実態に応じた環境設定を行うことで、指導効果を向上させる取組が組織的にできたと評価できる。</p>	<p>安全・安心な教室環境チェックリストは、学級担任の基準でチェックしており、チェック項目を具体化・標準化する等の改善が必要である。</p> <p>感動と癒し体験の充実のため、スノーズレンルームの積極的活用やセンサリーガーデンの整備が必要。</p>

* 「**評価**」の基準 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：あまり達成できなかった D：全く達成できなかった

重点目標 2 学習の保障に向けて		自己評価		学校関係者評価	次年度への課題
重点課題	重点目標	活動計画と評価指標	評価	学校関係者の意見	今後の改善方策
<p>児童生徒の個々のニーズに応じた自立活動の指導の妥当性の検証が不十分である。</p>	<p>①外部専門家を導入した自立活動の授業改善に向けた取組を検証する。 〔自立活動部〕</p> <p>②児童生徒の課題やニーズに応じた個別の指導計画を作成する。 〔全学部〕</p>	<p><活動計画></p> <p>①外部専門家（PT・ST）による、自立活動の授業に対するコンサルテーションを活用するために、コンサルテーション前に各学級・HRで授業検討会を行い、質問内容を整理する。また、コンサルテーション後にグループで報告会を行い、共通理解を深める。コンサルテーションを活用した改善授業を行う。</p>	<p><活動計画の実施状況></p> <p>①学級担任がコンサルテーション前に事前授業・授業検討会、または係との話し合いを行い質問事項の絞り込みを行った。コンサルテーション後に報告会を行い、指導助言や改善点を記録用紙にまとめた。各学部で取り組んだ外部専門家を活用した授業改善の取組を、1月30日の実践報告会で発表した。</p>	<p>重点目標2の総合評価</p> <p><評定></p> <p style="text-align: center;">B</p> <p>-----</p> <p><所見></p> <p>自立活動の授業改善の取組は、「研究と実践」という形で発表することができた。隣接する徳島赤十字ひのみね総合療育センタースタッフの支援により、よりきめ細かな指導を目指した授業計画が立案できるようになった。</p> <p>外部専門家のコンサルテーションを、有効的に自立活動の授業に反映させるためのシステムを整備するなど、効果的な活動ができた。アンケートでも86%が効果的であったと回答しており、一定の評価は得られた。</p> <p>キャリア教育支援プログラムはよく考えて作成されている。基本を押さえてベースとして利用すると活用も促されるのではないかな。</p> <p>保護者が積極的にニーズをあげていくことが必要。ニーズがあるから、</p>	<p>外部専門家を導入した取組により、専門家の指導・助言を得ることの必要性や有効性を理解することはできたが、まだ十分活用できていない。</p> <p>今後は、教員自身が運動発達や認知発達等について学び直した上で、専門家の指導・助言を活用し、授業改善に結びつけるようにしたい。</p> <p>児童生徒の課題に応じた目標設定ができたが、指導の手だてを含めた検証が必要。</p>
		<p><評価指標></p> <p>①-1 外部専門家の指導助言を活用して授業改善に取り組み、アンケートにより児童生徒の変容が見られたという教員評価を80%以上得る。</p> <p>①-2 アンケートにより、各学級・HRでの授業改善の取組により、指導方法が改善され、評価が明確になったという教員評価を80%以上得る。</p> <p>②-1 Lifeの研修を行い、実態把握をグループで行う。</p> <p>②-2 ケース会での検討により、より児童の実態やニ</p>	<p><評価指標の達成度></p> <p>①-1 教員アンケートで、「自立活動の授業で児童生徒に指導の効果が見られたか」という質問に対し、「とてもそう思う」が12名（27.9%）、「そう思う」が25名（58.1%）、合計86.0%であった。</p> <p>①-2 教員アンケートで、「外部専門家の指導・助言を活用し授業改善した結果、児童生徒の評価を明確にすることができたか」という質問に対し、「とてもそう思う」が10名（21.7%）、「そう思う」が25名（54.3%）、合計</p>		

		<p>ズに応じた目標がたてられたという教員評価をアンケートにより80%以上得る。</p>	<p>1.0%であった。</p> <p>②-1 1学期末に研修を実施し、児童全員にLifeによる評価を行った。</p> <p>②-2 ケース会で検討を行うことで、より児童の実態やニーズに応じた目標を設定することができたという教員評価が86%であった。</p>		<p>問題点・課題点が見えてくる。</p> <p>問題点・課題点 が明らかになるこ とにより、卒業後 においてどのよう なことが必要な か明らかになり、 今何をしなければ ならないかがは っきり見えてくる。</p>	
<p>外部の専門家や協働体制による授業改善が不十分である。</p>	<p>本校におけるキャリア教育のあり方を検討する。</p> <p>[支援開発部] [教育推進部]</p>	<p><活動計画> 児童生徒のキャリア教育の基本的な考え方と教育類型別のキャリア教育支援プログラムを外部専門家等の協力を得ながら検討し、学習や生活指導等に利用できるものを教育課程類型別に作成することで、キャリア教育的内容を視点を考えた授業改善を目指す。</p> <p><評価指標> 教育課程類型別におけるキャリア教育支援プログラムから、個々の児童生徒の学校生活や卒業後の生活に向けた授業で活用できた評価をアンケート等を通じて80.0%以上得る。</p>	<p><活動計画の実施状況> 類型別の教育支援プログラム試案の作成が、児童生徒の実態や実際の進路先を想定した内容、また、教育課程に準じた内容への検討はできておらず今後は、外部専門家(就労や福祉の関係者等)のアドバイスを受けながら、教育支援プログラムが活用できるかどうか検討することが課題と考えている。</p> <p><評価指標の達成度> 教育支援プログラムの内容を検討中であることから、アンケートは実施できなかった。今後は、個別の指導計画を考えるにあたり、3つの視点(はたらく・生活する・たのしむ)から個別の指導計画に反映できるかを検討し、授業を実施後のアンケートから、活用の評価を得ることを考えている。</p>	<p><所見> 本校のキャリア教育のあり方を、外部専門家等のアドバイスを受けながら検討した。また、キャリア教育支援プログラム試案の作成は計画通りであった。しかし、肝心の指導場面への活用が十分実践できておらず、プログラム試案が有効であるかどうかの検証ができなかった。</p> <p>個別の指導計画にいかにかキャリア教育を位置づけていくか等次年度への課題が多く残った。</p>	<p>問題点・課題点が見えてくる。</p> <p>問題点・課題点 が明らかになるこ とにより、卒業後 においてどのよう なことが必要な か明らかになり、 今何をしなければ ならないかがは っきり見えてくる。</p>	<p>教育支援プログラム表が、児童生徒の教育課程および発達段階にしているのか、内容の見直しを行う。</p> <p>キャリア教育支援プログラムが個別の指導計画の作成時に活用できることを、学部や教育課程検討委員会等で検討すると共に、具体例を示す必要がある。</p> <p>個別の指導計画を、はたらく・生活する・たのしむの3つの視点から作成する試案を検討する。</p>

キャリア教育の
発達プログラム
実践が十分
である。

職業的自立を
めざす生徒の
キャリア発達を
促す教育プロ
グラムの実践。
[中・高等部]

<活動計画>

- ①個別の指導計画作成において、キャリア教育の視点を全授業で取り組めるよう位置づけ、ケース会をもつ。
- ②高等部段階で、職業的自立につながる資格取得に向けて、具体的な指導計画を立てる。
- ③働くことに関する体験授業や施設見学等を実施する。(中学部)
- ④ PATH を活用して将来に向けてのステップを具体化する。
- ⑤-1 社会生活能力検査や作業能力検査を実施する。
- ⑤-2 定期的に学習の記録をとり、自己評価をする機会を設ける。
- ⑥進路に向けて関係者の共通理解を図るために、定期的に関係者でケース会を行う。

<評価指標>

- ①-1 個別の指導計画の年間目標を 80.0 %以上達成する。
- ①-2 ケース会を年 3 回以上実施する。

<活動計画の実施状況>

- ①個別の指導計画において、「自立活動」枠を2つ設けて、全授業で取り組むキャリア教育の視点の目標をまとめ、学期初めにケース会をもった。
- ② 9 つの履修教科のうち資格取得にむけての指導計画を 6 教科で設定した。
- ③多くの施設を見学できるよう高等部 I 類型と連携しての企業見学等を計画した。
- ④ PATH を作成して 3 学期(卒業時)の目標等を決め、生徒がステップに応じて達成度を確認した。
- ⑤-1 ASA 社会適応スキル検査を実施し、未達成の項目で達成の可能性のある内容を各教科等で達成できるように取り組んだ。
- ⑤-2 プリント学習や体力測定等で記録をとり、目標を持って学習に取り組んだ。また、特別支援学校技能検定を受検して台ふき、パソコン、接客等の技能を習得した。
- ⑥学校職員でのケース会やセンターとのケース会を定期的実施し、進路や卒業後の生活について話し合った。

<評価指標の達成度>

- ①-1 個別の指導計画の年間目標を 90.3 %達成することができた。
- ①-2 学期初めに実施し、年 3 回実施できた。

<所見>

本校で職業的自立を目指す生徒は少数ではあるが、高等部卒業後に向け、中学部在籍時より計画的に指導を行った。中学部では、働く生活に向けての知識や技能の基礎を身につけることを主にして、体験的に行った。

高等部では、トップダウンの視点に立ち、指導内容を精選すると共に、職業的自立に必要なスキルを各種検査等で明らかにし取り組んだ。生徒がスキル獲得を意欲的に取り組めるように、各種技能検定へのチャレンジ等を積極的に導入した。

関係諸機関との連携においても、定期的なケース会や情報の共有を積極的に行い、一人を複数で支えるシステムの構築に取り組んだ。

中学部 I 類型では、卒業後の生活について幅広く考えながら、体験授業や施設見学を実施した。次年度は、職場体験実習の実施について検討する必要がある。

高等部 I 類型では就労を目指したキャリア教育に来年度も継続して取り組む。そのために関係機関との連携を密にし、卒業後の生活を見据えて必要な学力やスキルを精選し、実体験を通して学習できる環境を整え、実践力が身につけられるよう取り組む。

		<p>② 中学部 1 年で、2 つの検定を受検する。</p> <p>③ 体験授業、施設見学を年 3 回以上実施する。 (中学部)</p> <p>④ 将来設計図の初期のステップ (1 年間) の目標を 70 % 以上達成する。</p> <p>⑤ 各検査の評価や 1 学期始めの記録が 5 % 以上向上する。</p> <p>⑥ 学校関係者や関係機関を交えたケース会を月 1 回以上実施する (学校関係者のみの会も含む) (高等部)</p>	<p>② 受検はできなかったが、自主的に家庭 (病棟) 学習において、漢字検定 8 級、英語検定 5 級の問題集に取り組んだ。</p> <p>③ 体験授業を 2 回、施設見学を 3 回実施した。</p> <p>④ PATH の 3 学期までの目標の達成率は 73 % で、目標は達成した。</p> <p>⑤ 社会適応スキル検査では未達成の項目が 6 割達成した。体力測定では 1 名は 5 % 以上の記録が向上したが、もう 1 名は種目によっては向上があったが、平均では 5 % の達成には至らなかった。</p> <p>⑥ 学校職員間のケース会議は 7 回、センターとのケース会は 4 回、保護者との懇談は 3 回実施した。2 月に関係機関との拡大ケース会を行う予定。目標はほぼ達成した。</p>		
<p>障がいや病気のため、生活経験が少ない。</p>	<p>感動と癒しの体験につながる授業づくり [全学部]</p>	<p><活動計画></p> <p>① 校外に出かけて自然や地域社会とかかわる体験学習の授業を計画的に実施する。</p> <p>② 音楽の得意な教員等がチームを作り、様々な楽器の生演奏や歌声を取り入れたミニコンサートを行う。</p>	<p><活動計画の実施状況></p> <p>① 阿波踊り会館に出かけて観光客と一緒に郷土芸能を体験したり、しおかぜ公園に出かけて季節を感じながら海の景色の中でゆったりと過ごしたりする校外学習を実施した。校内で学習したことを校外で実体験する校外学習を実施した。</p> <p>② 教員によるミニコンサートや交流校生とのミニ</p>	<p><所見></p> <p>生活経験の拡大を目指した取組は、各学部・学級単位で児童生徒の状態に応じて計画され実施された。</p> <p>実施に際しては、目的を明確にするとともに、事前指導等をしっかり行った後に実施することで、少ない経験を最大限生かす工夫がなされた。評価基準もクリアしておりほぼ目標達成と評価できる。</p>	<p>生徒の障がいの程度が重度化しているため、校外活動は安全・安心な計画のもとで実施する必要がある。</p> <p>生活経験拡大を図る取組は進めつつ、校内においても感動や癒しの経験ができる環境を整え、授業を工夫していく必要がある。</p>

		<評価指標> ①昨年度より校外学習の回数を30%以上増やす。 ②ミニコンサートを年間2回以上実施する。	コンサートを実施し、生徒たちは楽しんで参加した。 <評価指標の達成度> ①校外学習の回数が昨年度より31%増え、目標は達成した。 ②ミニコンサートは3回実施することができ、目標は達成した。			
--	--	---	---	--	--	--

* 「**評価**」の基準 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：あまり達成できなかった D：全く達成できなかった

重点目標3 人権の保障に向けて						
自己評価				学校関係者評価	次年度への課題	
重点課題	重点目標	活動計画と評価指標	評価	学校関係者の意見	今後の改善方策	
学校全体と してICFの考 え方を活用す るまでに至っ ていない。	① LIFE を用い て、全児童生徒 の実態を経年 に渡り把握する方 法を築く。 [教育推進部]	<活動計画> ① LIFE の研修会を実施し、 全児童生徒について複数の 教員で LIFE を実施する。	<活動計画の実施状況> ① 1学期に学部ごとで研 修会を実施し、その後、 複数の教員で LIFE を実 施した。	重点目標3の総合評価 <評定> B ----- <所見> LIFE の導入は今年度から取 り入れたこともあり、まだ十 分な理解には至っていない。 しかし、アンケート結果から、 77%が自立活動の指導に活 かせることができたと回答し ており、LIFE 導入は自立活動 の指導の充実につながってい ると評価できる。 具体的な指導内容まで踏み 込んだアンケートではないた め、再検証が必要。	言葉や映像で説 明してなかなか 実感できない。し かし体験すること により大きく変わ る。 直接体験ができ るような機会（中 学校の職場体験等） を積極的に利用す る工夫が必要。 交流を通して、 同年代のサポータ ーを多く作ること が大切である。 毎年行っている と形骸化してしま い、マンネリにな りがちである。常 に支援学校側から 戦略を練って取り 組む必要がある。	ICF や LIFE の評 価と活用方法につ いて、研修会を定 期的に開催し教員 の理解を深める。 正確な実態把握 を経年に渡り把握 するためには、個 々の教員の理解力 を高める必要があ る。 LIFE 導入により 自立活動が充実し てきたというアン ケート結果の検証 と、具体的事例の 提示を行う。
	② LIFE の結果 を自立活動の指 導に生かす。 [教育推進部]	② 自立活動指導内容表を用 いて、LIFE の結果から一人 ひとりに必要な自立活動の 指導内容を明らかにする。	② 自立活動指導内容表を 活用した教員は少数であ ったが、指導のヒントを 得ることはできた。			
センター的 機能の一環と しての積極的 な地域への貢 献及び交流が 必要である。	乳児院等へ訪 問し、交流をと おして、地域 の方のQOLの向 上につながる取 組を実施する。 [支援開発部]	<活動計画> 乳児院等への訪問メンバ ーを募る。訪問メンバー数 に応じて、チームを編成し、 各学期に1回は乳児院への 訪問を実施する。	<活動計画の実施状況> 訪問希望メンバーは 40 人に達した。3 チームに 分け、各学期に1回ずつ 計3回訪問することがで きた。乳児院の方、訪問 メンバーともに笑顔あ ふれる交流をもつことが できた。	<所見> 乳児院への訪問は、計画通 りに実施できた。乳児院の幼 児も訪問を楽しみにしており、 交流を通じた地域貢献の目的 はほぼ達成していると考え る。 参加した教員には、地域貢 献だけでなく、地域のセンタ ー的機能の役割を持つ本校の 取組に対する理解が進み意識 の変化が見られた。	小・中学校の教 員の中には、まだ 支援学校について 十分理解してい ない状況が見ら れる。また、教育 を学ぶ学生の中 にも無理な者も いる。このあたり から啓発する 必要がある。	
		<評価指標> 乳児院の職員対象にアン ケートを実施し、交流につ いての感想が「満足である」 「やや満足である」が80% を上回る。	<評価指標の達成度> 交流に対して「満足で ある」という回答が100 %であった。			

<p>共に社会を 支える人と 支えあひあ 解し、支えあ うことの大 きさを学ぶ 必要がある。</p>	<p>交流及び共同 学習を充実さ せるための取 組を推進。 [小・高等部]</p>	<p><活動計画> ①啓発教材「ひのみねっ こくらぶ」の内容を検討し、 次年度改訂に向け準備する。 啓発の方法についても検討 する。(小学部)</p> <p>②-1 本校の生徒の理解を深 めるために交流相手校の生 徒に対して障がいの重い生 徒とのコミュニケーション のとり方や安全な車椅子の 介助方法について事前打合 せをする。 ②-2 交流活動終了後にアン ケートをとり、次回の活動 を改善する。(高等部)</p> <p><評価指標> ①-1 内容を検討し、改訂項 目を3項目設定する。3項 目の具体的改訂内容にそっ て次年度の計画を立てる。 ①-2 よりよい啓発の方法を 交流相手校へのアンケート から探り、次年度の活動計 画に具体化する。(小学部)</p> <p>②交流各校の参加生徒にアン ケートをとり、「充実した 交流活動ができた」という 回答を80%以上得る。 (高等部)</p>	<p><活動計画の実施状況> ①2学期末に配布校(市 内6校)からアンケート を回収予定。今後、結果 から、改訂項目を出し、 検討した。啓発方法につ いても意見が出ているの で使いやすい方法を模索 する。</p> <p>②-1 交流及び共同学習の 事前に相手校担当教員や 生徒と打合せを行い、生 徒とのかかわり方や支援 の方法について説明し、 安全に生活経験や人間関 係を広げる交流及び共同 学習を実施することがで きた。 ②-2 交流活動終了後にアン ケートや感想・意見を 聞き取り、活動時間や写 真撮影に関して改善を 図った。</p> <p><評価指標の達成度> ①-1 配布校からのアンケ ート回収が2学期末だっ たため、現在検討中であ る。 ①-2 2学期末に、ひのみ ねっこくらぶの配布校(市 内6校)からのアンケ ートを回収し、意見を踏ま えて検討する予定である。</p> <p>②参加生徒に対するアン ケート結果では、「充実し た交流活動ができた」と いう回答は100%で、目 標は達成できた。</p>	<p><所見> 各学部において計画された 交流及び共同学習は、計画通 り実施された。実施に当たり、 前もって担当教員同士で綿密 な打ち合わせを行うなど、き め細やかな計画と工夫により 当初の目標を達成することが できた。</p> <p>小学部で交流相手校への啓 発教材として準備している「ひ のみねっこくらぶ」は、歴史 も古く、両校児童にとってな じみの深いものになっている。 しかし、壁新聞の時代から電 子化(CD等)の時代へと変 貌を受け、さらなる効果的な 啓発方法を模索している。</p>	<p>小学部では、直 接交流を実施して いるのは市内1校 であるが、中学部、 高等部への継続を 考えると、市内の 小学校全校に対す る交流及び共同学 習の工夫が必要。</p> <p>周辺地域への理 解啓発をめざし、 取り組みを間接的 に支える啓発ビデ オ等をよりよいも のに充実させる必 要がある。</p> <p>交流及び共同学 習の取組をHP等 で情報発信してい く。</p> <p>高等部では、よ り充実した取組が 安全に実施できる ように事前指導を 継続する。また、 事後指導の取組を 充実させ、通信等 を活用した間接的 な交流の機会を増 やし、日常的な交 流につなげるよう な取組を行う。</p>
--	---	--	--	---	--

* 「**評定**」の基準 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：あまり達成できなかった D：全く達成できなかった